

世代間交流がもたらす効果の探索的研究

JASM 2020 MARCH

もくじ

1. 問題意識	3
2. 世代間交流の実践	4
3. 行動レベルの変化	6
4. 実践結果の測定の試み	10
5. まとめ	11

1. 問題意識

「世代間交流」を本レポートでは就学の前の子どもと高齢者との交流とし捉え検討する。この世代間交流の効果はいろいろと指摘される。たとえば、同じ敷地さらに建物を共有すれば、建設コストが抑えられるとか、調理室や食堂などを共有すれば、その分工事費が低く抑えられるといった指摘がある。

たしかに、別々の施設を利用するより、一つの施設を共同で利用する方が施設に関わる費用は低く抑えられ、維持管理費も別々で施設を運営するよりは安くなるであろう。ただし、現行の法制度ではこのような複合施設を作ることはむずかしい。いくつかの規制が存在するからである。

しかし、経済的な理由だけでなく、世代間交流は利用者にもたらすという実践報告がいろいろとある。たとえば、認知症の高齢者が子どもの面倒をみるようになったとか、子どもが高齢者と過ごすことによって語彙数が増えるとか、コミュニケーション能力が高まったといった報告である。

そこで、本報告では、経済的視点からではなく、利用者にとってどのようなメリットがあるのかという視点からリサーチした結果を提示する。

1.1 施設利用者の目的

就学前の子どもの発達において、重視される代表的な能力としては、

1) 認知能力

知識の記憶や情報を処理する能力など

2) 身体的能力

歩行などの運動機能や箸を使うという作業機能など

3) 社会的能力

挨拶などのコミュニケーション能力や友達と一緒に遊ぶ能力など

をあげることができる。

上記の能力が発達することによって、子どもは自立的に生活することができるようになる。そのために、保護者をはじめ保育士、幼稚園教諭などが協力しながら、サポートする。いずれも育成しようという意図をもち、様々な活動をする。これに対して、世代間交流の場合、高齢者が子どもを育てようとする意図をもって接することはほとんどない。たとえば、幼児に言葉を教えようと話かけるわけでもなく、躰けをしようとして行動を起こすことはほぼない。あくまでも、対等な立場で視線を合わせ、言葉を交わすのである。つまり、話したいから話かけるというシンプルな関係が成立しているのである。

ここに、世代間交流の大きな特徴があるといえよう。家族や親類ではなく、他人でありながら、一定の時間を一緒に過ごすことは現代の日本社会ではめったに

ない。保育所であれば、年齢の近い子ども同士の交流、あるいは大人である保育士との関わりはある。しかし、年齢がまったく違う高齢者と一緒に過ごすことは子どもにとって発見の連続であろう。このような経験が上記の3能力の発達にどのような影響を与えるのか、興味深いところである。

他方、高齢者が施設を利用する目的は子どもと同じである。ただし、子どもが発達を目指すのに対して、能力の回復あるいは維持が主要なゴールとなる。とりわけ、身体的能力 認知的能力については焦点が当てられる。社会的機能、たとえば、会話を十分に理解できない、あるいは発話が難しい場合、認知的機能の衰えが主要な原因になっている。ちなみに、子どもが発話障害を抱えている場合は、身体的能力の問題であることが多いと言われる。

1.2 世代間交流の効果

世代間交流の当事者となる高齢者および子どもにとって 1.1 で議論した諸能力が向上することが期待される。別の表現をすれば、参加者の諸能力の向上が世代間交流の効果であるといえる。

ただし、具体的に効果を測定することは簡単ではない。保育士や高齢者施設の職員の観察記録を分析することがこれまで行われてきた。これは参与観察であり、実際に交流を通じて、高齢者や子どもの変化を時系列的に整理しているので説得力のある資料であるといえる。

別の方法としては、特定の能力に焦点を当て、その変化を数量化することである。この場合、時系列的な測定ができることが望ましい。ところが、高齢者の場合、施設に入所しているということは介護を必要としていることを意味する。そのため、通院、入院などで参加できなかつたり、そこまでの状態にならなくても体調を崩し世代間交流に参加できなかつたりする。したがって、継続的にデータをとることができる母数は少なくなる。

また、子どもの場合、月齢とともに能力は一般に向上するので、向上の原因を世代間交流だけに求めることは難しい場合がある。可能であれば、月齢の影響と世代間交流の影響を区分できることが望ましい。

2. 世代間交流の実践

2.1 プログラム概要

プログラム大きく2種類あり、「イベント」と呼ばれるなんからの行事を行うものと、「あいさつ運動」とよばれる子どもが高齢者施設（サービス付高齢者向け住宅）に訪ね、挨拶ができればスタンプをもらおうという活動である。具体的なプログラムの内容は高齢者施設の職員と保育園の施設長が中心となって設計した。

イベントのなかには、七夕まつりとかクリスマス会とか年中行事も含まれる。また、あいさつ運動は夏休みのラジオ体操のときのように子どもがカードをもつていき、スタンプを覚えてもらうとスタイルである。

2.2 時期

2019年5月からスタートし2020年2月で終了した。当初の計画では、3月に卒園式に高齢者も参加して実施する予定であったが、コロナウイルスの影響で中止となった。

2019年度は総計17回の世代間交流が実施された。なお、時間帯は子どもたちが登園し朝の会が終わったころ、また高齢者は朝食が終わったころが良いとの判断で、10時頃から30～40分間で実施した。

- S-1 2019年5月17日 イベント 自己紹介 子どもの合唱
- S-2 2019年5月20日 あいさつ運動
- S-3 2019年6月7日 イベント 子どもの合唱大会
- S-4 2019年7月5日 イベント 七夕飾り
- S-5 2019年8月6日 イベント 絵本の読み聞かせ
- S-6 2019年8月13日 あいさつ運動
- S-7 2019年8月27日 あいさつ運動
- S-8 2019年9月4日 あいさつ運動
- S-9 2019年9月12日 イベント 敬老の日 お祝い
- S-10 2019年9月25日 あいさつ運動
- S-11 2019年10月15日 あいさつ運動
- S-12 2019年10月31日 イベント ハロウィーン
- S-13 2019年11月15日 イベント リース作り
- S-14 2019年11月18日 あいさつ運動
- S-15 2019年12月24日 イベント クリスマス会
- S-16 2020年1月18日 イベント 餅つき（保護者も参加）
- S-17 2020年1月23日 あいさつ運動
- S-18 2020年2月3日 イベント 節分豆まき

2.3 運営方法

高齢者と子どもは別々の施設で過ごしているため、世代間交流のために基本、子どもが高齢者施設の食堂を尋ねるといったスタイルをとった。

まず、高齢者には世代間交流開催の前日に告知し、さらに朝食後に参加の意思を確認した。それでも、忘れていたり、通院あるいはディサービスへの通所などで予定参加者が減ることもあった。また、世代間交流のあとはその場で昼食という日課が決まっているため担当職員はスケジュール管理を厳格に行う必要があった。

他方、子どもはクラス毎に担任が連れてきた。会場である3階まではエレベーターで移動する子どもと、歩ける子どもは階段を使った。いずれの場合も子どもが全員、定刻に揃うためには早い段階での準備が必要であった。

そして、世代間交流が終了し、子どもが保育園に戻ることになるちょうど昼食の時間であり、保育士はすぐに準備に取り掛かることになる。

世代間交流の前後の時間調整や準備の時間をどのように調整するかが世代間交流を成立させるポイントとなっている。

3. 行動レベルの変化

以下の記述は2.2で整理したS-1、S-2で時期を示す。

3.1 5月から6月

S-1の初対面にもかかわらず、3歳児以上の子どものなかには積極的に高齢者に話しかける行為が観察された。物怖じせず、初めての人にも関心もったようである。他方、子どもの姿をみるだけで涙する高齢者もいれば、どのように子どもに接すれば良いか戸惑う高齢者もいた。

なかには、高齢者に「何歳？」と聞く子どももいた。入居者は保育園児からみれば、曾祖父、曾祖母の年齢にあたり、興味をもったようである。

S-2ではあいさつができたならスタンプをもらおうという交流であったが、2回目となり、子どもだけでなく、高齢者も積極的に話しかけるようになった。また、高齢者同士でスタンプの押し方を教え合う姿も見られた。あるいは、「〇〇さん（施設職員）の企画だから協力するよ」といった発言もあった。

6月に入ると（S-3）、子どもによる合唱会が開催された。歌の練習を重ねた結果、高齢者から好評であった。イベントが終わったあとも1日中楽しかったと語る高齢者や次はいつ来てくれるのかと尋ねる高齢者もいた。最初は不機嫌な顔をして参加した高齢者も最後には笑顔になった。他方、子どもは拍車をもらったことや直接褒められたことを喜んでいた。あるいは、高齢者と話し込み離れない子ども（4,5歳児）もいた。このイベントの前には、2歳児が「おじいちゃん、おばあちゃんのところに行くの？」と保育士に話しかけ喜んでいた。さらに、家に帰ってから、保護者に高齢者にあった経験を伝える子どもも現れるようになった。

わずか3回の交流であったが、子どもも高齢者も楽しんでいる様子が伺える。もちろん、先述の理由から参加する高齢者がいつも同じではないが、参加して「場」を共有することを楽しんでいることは確認できた。

3.2 7月から8月

S-4では七夕飾りを一緒に行ったが、これまでの活動とは違い、共同作業がともなった。つまり、参加者それぞれができる範囲で飾りの貼り付けなどをおこな

った。一連の身体活動によって、これまでとは違う変化が見られた。ハイタッチやハグするという身体を通じての交流が始まったのである。高齢者も自ら立ち上がり子どもに近づき話しかけるという場面も観察された。これまでは、たとえば歌を歌う立場と聴く立場で立ち位置に区切りあり、主体的に交流するという場ではなかった。それが、七夕の飾り付けという身体活動が伴うことで、一挙に交流が深まったといえよう。同時に、これまでの活動を目の当たりにして緊張した子どももいたが、他の子どもと手をつなぐことで安心するという場面もあった。

S-5の絵本の読み聞かせは、ボランティアによって行われた。高齢者も子どもも一緒になって聴くというのがメインであったが、その後に子どもが歌を披露するという行事もあった。さらに、歌唱のあとは高齢者と握手して退場した。絵本の読み聞かせは1冊3分程度のもので、子どもがあきない工夫がされているだけでなく、絵本の世界に入り込み同じ動きをする子どももいた。また、子どもと一緒に歌い出したり、手拍子したりする高齢者もいた。

S-6でのあいさつ運動では、高齢者のスタンプを押すのが慣れてきたようで、職員のフォローがあまり必要なくなった。また、まごついている高齢者にスタンプを押す場所を子どもが指示する場面もあった。子どもが高齢者の行動を観察できるようになったこと、さらにはその行動が適切でないと判断し、適切な行動を指摘できるようになったことを意味する。

S-7もあいさつ運動であるが、積極的に子ども寄って来ないと不満を漏らす高齢者もいた。一方で、子どもと一緒にいるのは疲れると楽しそうに語る高齢者もいた。さらに、子どもに積極的に質問し、それに対して恥ずかしながら答える子どももいた。相互に言葉を交わす回数が増えたことが観察された。また、子どもが来る前に、「早くこないかな」とそわそわする姿も見られた。

3.3 9月から10月

S-8のあいさつ運動では新しい動きが見られた。正確には運動が始まる前に、高齢者の会話が直接世代間交流に関連しない内容だった。高齢者同士で自身の出身地や家族構成を話し始めたのである。サービス付高齢者向け住宅では、各自が居室で生活することを原則とする。リクエストに応じて、食事、掃除、選択、入浴介助を行うシステムになっている。一緒にリハビリをしたり運動したりする老健などとは違い、利用者同士が会話する場はほとんどない。それぞれの生活はプライベートが優先されている。そのため、隣の部屋の利用者の個人情報を知ること、あるいは自らのプライベートな情報を話すことはほとんどない。このような生活状況を踏まえ、今回プライベートについて語るのというのは画期的なことであるといえる。また、不安気な様子の子どもの対しては、手を握ったりして気を使うようになった。

次のS-9は「敬老の日」のイベントとして子どもたちから歌の披露と手作りのプレゼントがあった。この頃になると双方とも慣れ、交流がさらに深まるようになった。ハイタッチなども自然にするようになったり、退出するときもどちらか

らも手をふるようになってきた。さらに、プレゼントを渡すとき、高齢者の名前を職員が紹介すると、その名前を繰り返す2歳児も現れた。

S-10 はあいさつ運動だけでの予定であったが、高齢者が練習してきて自発的にハーモニカを披露したということで子どもたちの前で演奏した。演奏者に近づき興味深く覗き込む子どもや曲を知っていると話す子どももいた。演奏を通じて、高齢者と子どもと一緒に楽しみ会話する姿があった。今回も2歳児が高齢者の名前を呼びながらあいさつ運動のスタンプをもらっていた。また、先の敬老の日に子どもがプレゼントとした飾りを食堂で見つけて喜んでる2歳児もいた。

S-11 はあいさつ運動であったが、それぞれの立ち振舞がスムーズになり、施設の職員や保育士のサポートの手数がだいぶ減った。子どもたちがクラスごとに交代やって来るので、こどもを待つ時間が何度かあった。その間、高齢者は互いに自分の子ども頃に話を始めた。

S-12 はイベントとしてハロウィーンであった。事前に職員がお菓子を小袋に分け、高齢者に子どもが訪ねてきたらあげるようにという段取りをつけていた。とくに、今回のイベントのピンとは子どもたちが高齢者の部屋を尋ねることである。予め許可を得た高齢者だけに限られていたが、子どもたちが部屋に入り練習してきた「トリック・オア・トリート」というと楽しげにときに戸惑いながらお菓子をあげる姿があった。高齢者の部屋に親族や職員以外の人間が入るということはこれまでほぼなかったという。先にも説明したように、各個室で暮らしプラベートが守られることがサービス付高齢者向け住宅の基本なので、他の入居者の部屋を尋ねることはまずない。同時に、そもそもハロウィーンという行事自体を知らないにもかかわらず、子どもたちのために協力してくれたのである。

3.4 11月から12月

11月に入ると、S-13 でリース作りを一緒に行った。リースの材料は保育園の屋上で栽培していたさつまいものつるを乾燥させたものである。会場となっている食堂で、それぞれがクリスマス用のリースを作成したのである。そして、子どもが高齢者のところに行き自分で作ったリースを見せて、褒めてもらうといった光景がみられた。

S-14 はあいさつ運動であったが、ある2歳児は高齢者の名前を呼ぶだけでなく、その人からだけスタンプをもらいたがるようになった。親密な関係性ができたことが確認できた。その他の子どももあいさつをしてスタンプをもらい、高齢者と話すことを楽しんでいるようであった。

年末の S-15 はクリスマス会であった。高齢者がハーモニカで「ジングルベル」を披露したり、紙芝居を見せたりした。そして、事前に準備したお菓子のプレゼントを子どもたちはもらった。今回のイベントでは高齢者側が準備したり、出し物をしなければならなかったのも、緊張感が漂っていた。そして、出し物の間、子どもたちが笑顔を拍手で応えてくれたので、満足げな笑みが変わった。子どもたちが「ハーモニカのおじいちゃん」と呼び始めた。他方、子どもはキリスト

の「生誕劇」を演じた。これは、保育所で一度披露したものの短縮版を披露したものである。

3.5 1月から2月

年が変わり、S-16は餅つき大会であった。保護者も参加し人数が多くなったので、2交代制で実施した。祖父母の姿もみられた。また、場所もこれまではサービス付高齢者向け住宅の食堂が中心であったが、はじめて保育所で実施した。子どもと高齢者が交代で餅つきをし、周囲で掛け声をかけるというスタイルをとった。また、別につきたて餅を準備しておき、子どもが家族と一緒に食べることができるようにしていた。複数の高齢者も積極的に参加し、杵をふるった。いずれにしる、3世代間の交流となった。

次がS-17であいさつ運動であった。新しく入居された方も参加したが、すぐに打ち解け子どもとの交流を楽しんでいた。このような雰囲気ができたのは、8ヶ月あまりの努力や工夫の蓄積と、それまで参加した高齢者、子ども、そしてサポートした職員、保育士が一体となって交流を楽しみながら進めてきたからだと思われる。この間、子どもの成長も著しく、餅つきで杵をふるった高齢者のことを記憶していて、スタンプをもらった後、保育士にそのことを話した。

最後のイベントがS-18で、節分の豆まきであった。職員と高齢者の男性が鬼になり、子どもたちが落花生を投げるというやり方をした。なお、子どもたちは豆まきが終わってから、保育所に戻り、そこで食べた。

3.6 全体的特徴

1) 子どもの変化

高齢者との経験を第三者（保護者）に話すということが3回目の世代間交流の後で確認できた。さらに、高齢者をお年寄りではなく、名前を呼び個人として認識できるようになった。第4回以降は、ハイタッチやハグなど身体的の接触も積極的にとるようになった。

また、直接、世代間交流の場のエピソードではないが、散歩にでかけ高齢者を見かけると近づき話かける子どもが現れたという報告があった。

回数を重ねると、特定の高齢者とののみコミュニケーションをとるという態度が見られた。このことは参加した高齢者に対して好みを示すものであり、親密な関係が成立したことを意味する。

2) 高齢者の変化

子どもとの関わることを自体を楽しみにし、また、生活のリズムとしている高齢者が確認できた。もちろん、入居者すべてが参加したわけでもなく、参加を拒否する高齢者もいた。しかし、子どもが食堂だけでなく、ハロウィーンなどのイベントでは居室に尋ねることもあったが、特段の不満はなかったようである。先にも触れたように、普段は居室でほぼひとりで過ごすことが多く隣室との行き来

もほぼない。そのよう生活しているなか、子どもたちが大勢で居室のあるフロアに来ることは相当うるさかったはずである。しかし、特段の不満は出なかったようである。つまり、イベント等には参加しなかったものの、消極的な意味で子どもたちを受け入れたとみなして良いであろう。

また、世代間交流で子どもと接することが引き金となって自己開示する高齢者が現れた。繰り返しであるが、入居者同士でこれまでほとんどなかった。したがって、プライベートのことを話すことなどほぼなかった。それが8回目で、出身地や家族構成を話すようになり、11回めでは自分自身の子ども時代のことを話すようになったのである。一般に自己開示は返報性を促すことが知られている。つまり、相手が自分の子ども頃のことを話すと、相手の話に応えるように、子どもの時の思い出を話すようになるといわれる。このように自己開示は会話を活性化させるのである。

4. 実践結果の測定の試み

世代間交流の効果を測定するために、子どものコミュニケーションの発達程度を測定することとした。方法は保育士の観察によるもので、「日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙」を使用した。

この質問紙は言葉を話せない乳児（月齢、8ヶ月～18ヶ月）には「語と身振り」編を、月齢16ヶ月～36ヶ月の幼児には「語と文法」編を採用した。

対象となった子どもの内訳は次の通りである。

乳児：13名

幼児：2名

その他：38名

これまでのリサーチの結果から、本質問紙では月齢に応じた発達段階を測定できる。とくに、大きくコミュニケーション能力が高い子どもは確認できなかった。

むしろ、月齢つまり生活年齢に比べ、コミュニケーション能力の遅滞しているのではないかと考えられる子どもが数名いた。月齢が76ヶ月であるにもかかわらず、語彙が19ヶ月と判断された子どもがいた。ただし、はじめてこの種の調査を実施する保育士ばかりなので、誤記等の理由も想定されるので、あくでも三項データとして取り扱うべきであろう。

また、日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙も月齢が重なることを、つまり発達段階に個性があることを想定していることにも注意すべきであり、断定は避けるべきと考える。

なお、高齢者については感情の変化を顔の表情筋から測定しようとしたが、意味のあるデータが収集できなかった。

5. まとめ

本報告では、世代間交流の試みについて分析してきたが、その効果について十分に把握できなかった。サービス付高齢者向け住宅の職員、保育士など担当者にとっては明らかな変化が見られたにもかかわらず、数量的把握が課題として残った。

改めて、世代間交流の効果を測定するためには、次のような課題があると考えられる。老人介護施設も保育所もその目的は利用者の1) 認知的能力、2) 身体的能力 3) 社会的能力の維持、向上である。しかし、今回の測定は最後の社会的能力のみに焦点を当てた。具体的には、子どもに対しては、コミュニケーション能力を、高齢者に対しては情動の変化を対象とした。そして、結果として十分な分析結果を得ることができなかった。

その理由は、子どもの調査の場合、十分に調査の目的を理解しないまま実査に入ったこと、また、質問紙の記入の負荷が大きかったことなどが指摘できる。また、高齢者の場合、特定の職員による調査に大きく依拠したため、当初の調査目的を十分に達することができなかったものと考えられる。

このような調査体制を再検討することが次の課題である。また、調査手法についても、手軽にできる方法を検討する必要がある。

さらに、上記の3能力を対包含するためには、新たな視点が必要となる。その候補のひとつが「実行機能」である。いわゆる非認知能力と呼ばれるものと同じであるが、脳科学の概念である。目標を達成するために自分の行動をコントロールする能力である。

成人の場合、この機能が弱くなると、認知症の可能性が高いといわれる。他方、子どもの場合はこの機能が十分に発達しない場合、発達障害が疑われる。また、高い子どもの場合、将来、社会的に成功するといわれる。よく言う我慢強く努力を続けるかどうかの指標となる。

このように実行機能は認知的能力および社会的能力に密接関連する。さらに、近年の研究では、実行機能は身体活動と関連することも知られるようになった。つまり、実行機能を測定できれば、網羅的に目的である能力をカバーできる可能性が生まれる。実行機能を分析することで、高齢者も子ども同じ次元で変化を把握できることになる。

今後は、世代間交流の継続的観察、分析、そして測定方法として高齢者には「セルフコントロール尺度」などでの測定、子どもには、CBQ (Children's Behavior Questionnaire) などを用いることを検討したい。